

## 序論 オーストラリア・アボリジニ研究 日本からの視点

著者	小山 修三
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	015
ページ	1-10
発行年	1991-12-13
その他のタイトル	Introduction: Aborigines in Contemporary Australia
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003594">http://doi.org/10.15021/00003594</a>

## 序論 オーストラリア・アボリジニ研究

——日本からの視点——

小 山 修 三\*

### I. 人類学とアボリジニ社会

1. 夢の狩猟採集民
2. 孤立した大陸
3. 親族組織の王国
4. 神話と儀礼の世界
5. 文化変容と応用人類学の視点
6. 二極化する現代アボリジニ社会
7. 今日のアボリジニ研究

### II. 日本人としての研究

1. 国立民族学博物館における研究の経過
2. 本書の構成
3. 日本人による研究の立場と展望
4. コンピュータからの視点
5. 子供と心理

## I. 人類学とアボリジニ社会

### 1. 夢の狩猟採集民

アボリジニの地オーストラリア大陸は人類学史上でもっとも華やかな舞台の一つであり、この分野を専攻するものにとって憧れの地だといっていいすぎではないだろう。

アボリジニは狩猟採集民で、数家族を中心とした15-30人ぐらいのホルドあるいはバンドと呼ばれる小規模の集団を作り、ほとんど定着することなく水や食糧を求めて遊動していた。そのため日常の生活具は簡素で、家屋や衣服にもあまり複雑なものはない。その様な状態は大英帝国がこの大陸に植民地を置いた200年前まで守られていた。しかも、大陸の北部では接触はずっと遅れ、中央砂漠では1984年になってはじめて文明と接触 (first contact) したグループがあらわれたと大々的に報じられたほどである。結局それはファースト・コンタクトではなくなんらかの理由でセツルメントからはなれていた人々であることがわかった。しかし、現代でさえも10年以上にわたる長い期間、砂漠のなかで近代文明と隔離された生活を営む集団が存在したことはまぎれもない事実である。人類のもっとも原初的な生活がこの地で存在していたことは

\* 国立民族学博物館 第四研究部

現代人の夢をかきたてる。アボリジニについて白人の探検家や開拓者、牧師、そして人類学者が数多くの記録や研究をのこしている所以である。

## 2. 孤立した大陸

オーストラリア大陸の物質文化には弓矢がない。それほど文化的な孤立化が激しかったといえる。この大陸には方言を含めると600ちかい言語があった。それらの言語はオーストラリア語とでもいうべき一つのまとまりとしてとらえることができる。しかし、現在のところ近接する東南アジアやオセアニアの諸民族との系譜関係をたどることはできない。

強い孤立化の現象はアボリジニの形質についてみられることである。アボリジニは黒褐色の皮膚、波状の黒い頭髪、強い眉上突起、くぼんだ眼、広い鼻、大きな歯などの特徴を持つ。最近アーネムランドで発見されたマラクナニャ (Malakunanja II) 遺跡は、熱ルミネサンス法によって5万年前という年代が示されている [ROBERTS *et al.* 1990]。また、化石人骨はマンゴ湖遺跡の3万年前のものがもっとも古い。この最古の人骨の一部にはきゃしゃな型 (*gracile*) の現代人的なものがある。ところが年代的にはずっと新しいコウ遺跡からは、がっちりした型 (*Robust*) の頭骨でネアンデルタール的な様相を持った化石人が発見されており、その年代は1.3万年である。つまり、オーストラリアには二種の異なった人種が共存した可能性があり、現在のアボリジニの形質の変異の大きさは二つの系統の人種の混血によるという仮説がだされ [THORNE 1977]、形質人類学者の注目をあびている。これらの事実は狩猟採集経済が長く守られたこと、道具に弓矢のないこともあわせて、オーストラリア大陸の孤立性の強さという特徴を浮きたたせているのである。

## 3. 親族組織の王国

現代科学には人類は原始から文明へと進化したという大きな前提があるようだ。農耕や工業化社会と比べ、狩猟採集民のアボリジニの生活様式や道具類はその概念によくあう簡素なものであった。ところが原始的であるはずのアボリジニ社会の親族組織は世界の他のどの文化と比べても例をみないほど複雑かつ整然としたものであることがわかってきた。たとえば、東アーネムランドにみられるサブセクション制は半族や系譜的世代によって人々が8つの範疇にわけられ、一定の法則にしたがって婚姻をはじめ社会的義務や行動が厳しく規制されているのである。なぜそのような構成になっているのか、そのメカニズムはどうなのかなどについて古くからラドクリフ＝ブラウ

ン、レヴィ=ストロース [RADCRIFFE-BROWN 1930, 31; レヴィ=ストロース 1977, 78] をはじめとして多くの理論的研究がだされている。また現地調査にもとづいたものとしては、ハイヤットがギジンガリ族のコミュニティの日常生活で親族規制がはたす意味や機能について興味深い報告をしている [HIATT 1965]。現代の文化人類学の教科書には「キンシップ王国の怪物 (Goliath of the kinship realm)」 [HARRIS 1971] として必ずとりあげられ、学徒を悩ませていることはよく知られていることである。

#### 4. 神話と儀礼の世界

複雑な発達をみせているものは親族組織だけではない。彼らの神話伝説、それに関わる儀礼や芸術もそうである。たとえば儀礼に関わる造形は砂漠地方では数ヘクタールにわたる壮大な砂絵が描かれ、アーネムランドの祭りの中心となる飾られた柱や羽毛で飾られた編み籠は製作に数カ月が費されるほどの手の込んだものである。また数万年にわたってかき重ねられてきた岩壁画も木皮画という形で現在に生きている。

アボリジニの神話、儀礼、芸術を統合しているドリーミングと呼ばれる独自の宇宙観は東洋の輪廻思想に似た体系を持っており、西洋の社会学者は強い関心を寄せている。たとえばユングは、フロイトの個人の深層心理をさらに拡大して普遍的無意識の概念を提唱したがその時アボリジニを例にあげ、その精神と土地との関わり方を人類の根元的なものであるとした [ユング 1985]。デュルケームはその社会学の基礎概念である集合表象 (representation collective) の説明に当たって中央砂漠の儀礼具チュリンガをとりあげ、物質化された表象が集団の共通した意識に置き換えられている具体的な例であると説明している [デュルケーム 1975]。

#### 5. 文化変容と応用人類学の視点

アボリジニに対する研究は彼らが孤立し「原始的」な生活を保持していたという歴史的な興味からだけくるものではない。狩猟採集や原始的農耕を営む小社会が近代工業社会に接触するとき、両者のエネルギーの差は大きく、前者が変形をしいられ消滅することは明らかである。オーストラリアには白人との接触の後80年足らずで純血人種が消滅してしまったタスマニア島や、人口の激減と社会崩壊のためほとんど旧来の姿をとどめなくなった南部地方での事例があった。その姿はそれまでにアメリカ大陸などの例ですでに明らかにされていたことで、アボリジニ社会もやがて消滅することを予想する人も多かった。しかしオーストラリアでは世界の他の地域と比べて西洋文明の移入のタイミングが遅れたことも手伝い、その様な動きを予想したキリスト教人

道主義者たちが早くから政府に保護政策の強化をうったえたことで、民族の絶滅から彼らは救われることになった。その成果は1920年代からようやくあらわれはじめる。アーネムランド、キンバリー、中央砂漠などに大保護区がおかれ、保護対策も徐々にではあるが整っていったのである。

その様な流れの中でアボリジニ研究には二つの異なった方向が生まれる。第一は近代文明に出会った狩猟採集民がどのような変容を遂げるかを記録しようとする客観的な方法である。第二は研究の成果を積極的にとりいれ、当該社会を改善していこうとする応用人類学の分野である。後者はオーストラリア人類学の主流となっている。

## 6. 二極化する現代アボリジニ社会

現代のアボリジニ社会には遠隔地の純血アボリジニと都市の混血アボリジニという二つのグループがみとめられる。両者の成立過程と動態には大きな差がある。1920年から61年までの間でみると、前者はまだ減少を続けているのに対し、後者は増加している【小山 1988】。この事実は、混血アボリジニが新しいポピュレーション・グループとして都市部を中心に成立したことを示している。混血アボリジニは、白人との接触の結果生まれ、都市の白人社会の最下層に吸収されていたが、アボリジニ政策の改善ともなって次第にその姿を明らかにしてきたものである。

1960年代のアボリジニ集団についてジョーンズは、都市部では若年齢層の多い裾野の広いピラミッド型の年齢構成を示し、それが発展途上国型の爆発的な人口増加へのエネルギーを持つことを指摘している。一方、純血アボリジニの中心地であるノーザンテリトリーでの年齢構成は自然型で人口は漸増の傾向にあると述べている【JONES 1970】。そしてこの状態は1967年におこなわれた国民投票によってアボリジニにオーストラリア国民としての権利があたえられることが決まったことにより一層明確になった。

経済的基盤の確立と社会的地位の向上によって遠隔地社会では伝統的なライフ・スタイルに戻ろうとするアウトステーション運動が起こった。これは白人の作ったセトルメントを離れ、自分の領地で昔ながらのホルド的な村を作り、狩猟採集を中心とした生活を送ろうとする動きである。この運動は政府の積極的な援助を受けて制度化され、遠隔地では近代的な施設を整えたセトルメント（町）を中心に衛星のようにホルド的な構成を持ったアウトステーション（村）がとりまく生活組織ができ社会は安定した。これに対し、都市部では白人系アボリジニがアボリジニへと回帰しはじめ、人口が急増している。その要因の一つとして遠隔地社会での文化復興運動の成功による

アボリジニ・アイデンティティの確立をあげることができる。

## 7. 今日のアボリジニ研究

アボリジニ社会に自立の機運が強まった1970年代以後アボリジニ研究は再び大きな転機を迎える。民族学の調査に関しては古くから世界各地で批判がでていた。学者は学問的意義をたてにコミュニティに長く滞在し、生活や宗教などあらゆることを調べあげようとする。しかし部外者の存在で人間関係や財の不均衡がおこり、プライバシーがばらまかれてコミュニティ内に摩擦がおこる。調査の結果は公表されて、学者は社会的、経済的地位をえるが、コミュニティにたいしての見かえりはほとんどないことが多い。これは知識の一方的搾取に他ならないではないかというものである [小山 1987]。

アボリジニ社会においては彼らの世界観にもとづくもっと強い拒否の理由があった。土地は神聖なものであり、埋葬された祖先の骨は彼らの軀の一部であると信じている。ところが考古学者（形質人類学もふくむ）は墓地や聖地を掘りかえし、写真に撮り、骨を持ちさり、博物館に展示することさえある。また、成人式、葬送などの儀礼であつかわれる祭儀具やそこで歌われる神話や伝承、それにともなう踊りは女性や他部族には秘密にされるべきものである。しかし、民族学者はそれを写真、映画、スケッチにうつしテープやノートに記録するという、許すべからざるタブーを犯している。そのような理由から遠隔地のアボリジニ社会では民族学者の入域許可申請に対して申請者がどんな利益をコミュニティにもたらすか、誰が引き受け人になり、禁止事項を守らせるかなどを厳しく審査するようになった。これによって従来のオーソドックスな研究調査はほとんど否定され、住民の直接の利益をめざす土地権、女性の社会的地位、保健衛生、教育問題などの調査が中心となってきた。その結果、アボリジニ社会の福祉、伝統の再生、民族の自立のための貢献をはたしている [COOMBS 1978]。これは少数民族問題とも呼応しており、この方面でオーストラリアの研究者は世界でも先鋭的なグループとなっている。

## II. 日本人としての研究

### 1. 国立民族学博物館における研究の経過

国立民族学博物館では筆者と松山利夫氏が1982年に「オーストラリア原住民社会の

計量人類学的研究」という課題名で文部省科学研究費補助金をえてオーストラリアでの調査をはじめた。アボリジニ社会の民族学的研究としては日本では最初の現地調査であった。したがって、それまでは和文の概説書類もほとんどなく、カナダから調査に赴いた新保満氏の著書 [新保 1979] があるくらいのものであった。

その後、1984年には「オーストラリア原住民社会の再編成」、1986年には「オーストラリア・アボリジニ社会の経済変容」、1988年には「オーストラリア・アボリジニの都市集住とアイデンティティ」とオーストラリアでの現地調査が続き、さらに1990年からは「オーストラリア・アボリジニに関する民族学資料の比較分析的研究」（いずれも文部省海外学術調査補助金による）が継続中である。これらの調査とはほぼ平行して、国立民族学博物館での共同研究「オーストラリア社会の研究」「オーストラリアにおけるアボリジニと白人社会」、「オーストラリア・アボリジニの物質文化」がおこなわれている。

## 2. 本書の構成

本書の論文は、その主題と内容によって4つの部分にまとめてある。

第一部では、堀江・小山が、旧石器時代における人類のオーストラリア大陸への渡来の時期と経路について航海術を中心とした仮説をだしている。金田は入植時代の白人とアボリジニとの接触の状況を述べている。N. ピータソンは、20世紀初頭のアボリジニと白人との関係の一側面として写真にあらわれたアボリジニ像を通して白人のアボリジニ観を考え、最後に、細川はアボリジニ社会の状況を映像と製作活動のあり方から叙述しアボリジニ復権の方向を論じている。

第二部は、民族誌的観点からの論文からなる。小山はマニングリダ地域での現地調査とパウニンガ・アボリジナル・コーポレーションの会議録からアウトステーション運動の展開と組織化の過程を考察し、現代に生きる狩猟民の生活をささえる行政的構造とその問題点を提示している。松山はガマディ・アウトステーションでの調査から、彼らの儀礼と死生観を明らかにすることで変容をせまられる現代アボリジニの姿を描いている。河内、五島はマニングリダ地域でおこなった短期の調査にもとづく報告で、河内はアボリジニの歩き方の特徴について、五島はアボリジニの栄養について日本など他民族との比較を試みている。松本は、トレス海峡で永年にわたって採集した歌謡の風という興味深い視点をとりあげ、島民の自然観を分析した。トレス海峡諸島民はアボリジニとは歴史的文化的に系譜を異にするが、オーストラリア政府は同カテゴリーとしてあつかっている。

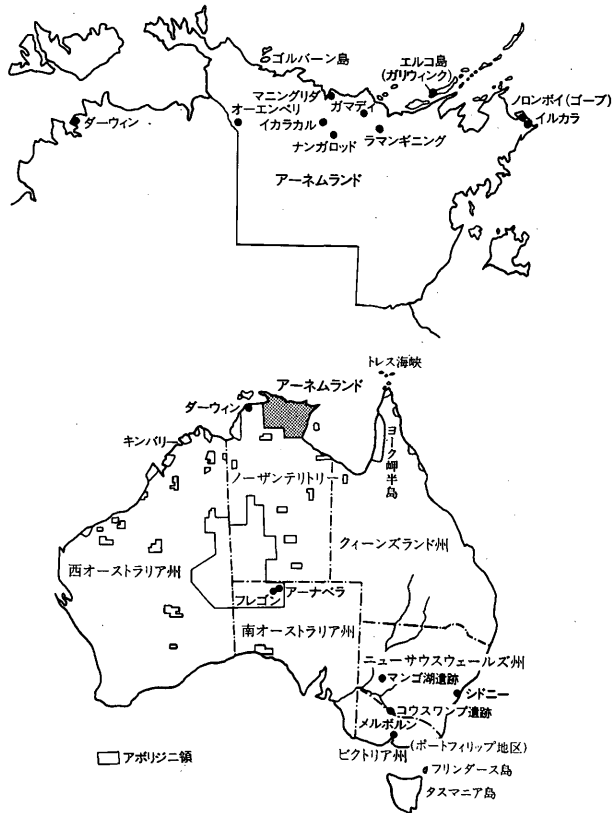


図1 本書にあらわれる調査地と関連地名

第三部ではコンピュータという新しい道具をアボリジニ研究に利用しようとしたものを集めた。中野はブーメランというアボリジニに独特な狩猟具をとりあげ、その形状、飛行特性についてコンピュータ・シミュレーションをつかい航空力学的に説明できないかと考え、その予察を述べている。ブーメランを従来の形や地域性とは異なる数式によって分類できる可能性があるという。杉藤はエルコ島での現地調査にもとづき婚姻規制を人口制御要因とみなし、類型的、静止的モデルではなく、コンピュータ・シミュレーションによるダイナミックモデルによって時代変化の要因をさぐろうとした意欲的な論文である。久保はマニングリダでの調査から文化によって情報のあらかし方、伝達、受けとり方の方法に差があることに注目し、民族情報学という新しい構想を述べている。

第四部は、心理学的視点からの論文と報告を集めた。藤岡はアボリジニの生活哲学



というべきドリーミングについて、その精神作用の認識のありかたを西洋科学的合理主義批判をまじえて考察している。森はユング心理学を中心として、その研究史のなかのアボリジニの意義について論考している。心理学の分野でフロイト、ユングらもアボリジニの心性に注目していたことがわかり興味ぶかい。板良敷の報告はアボリジニの子供の遊びを観察し日本との比較をおこなったものである。窪田はアボリジニの子供のパウム・テストの結果を白人、日本人と比較し、子供の発達過程の差について考察している。岡田は箱庭法という心理学的臨床技法を、テストとして利用し、ダーウィンに居住するアボリジニを含めたさまざまな民族の心のあり方の違いを示そうとしている。

### 3. 日本人による研究の立場と展望

歴史的、民族誌的手法による第一部・第二部の諸論文はすでに確立された手法になるものである。これに対してコンピュータの活用をめざした第三部、心理学的なアプローチと手法をつかった第四部はアボリジニ研究史のなかでは今まであまり手をつけられていない、あるいは新しい視点によるものが多い。そのため、概念、発想、研究史の整理や今後の見通し、パウム、箱庭などによる予備的テストの結果報告など形式の異なる論文が集まっている。

しかし、オーストラリアの学界を中心にすでに膨大な量の成果が生産されているアボリジニ研究の体系に対して、後発のわれわれの研究が日本人としての視点を生かしなんらかの貢献をはたそうとすれば、この部分にこそ展開の可能性が秘められていると考える。そのため1990年からはじめられた国際学術研究（代表者・松山利夫）を中心に次期調査への体勢づくりが進められている。また、アボリジニ研究におけるコンピュータと心理という新しい研究分野は我々日本人グループに対する現地マニングリダ側の要請から浮上してきたものであることを書き記しておかなければならない。

### 4. コンピュータからの視点

マニングリダにある行政機関バウィナンガ・アボリジナル・コーポレーション(BAC)はアウトステーションの生活、福祉、施設整備、教育などに関する全ての事務をとりあつかっている。しかし、アボリジニによる経営は名目はともかく人材不足による事務の非効率性が目立つ。これに対して、無人格で、スピードが速く、正確である（と信じられている）コンピュータの導入によって混乱を解決できるのではないかという現地の期待があり、政府も補助金をだすことに同意し、機器の設置が一挙に

進んだ。しかし肝心のソフト面は無視され、行政事務所や小学校などで使用可能なコンピュータ機器が山積みという状態が続いていた。そこでコンピュータに強い日本人に頼めという声のアボリジニの長老からあがり、私たちに協力の要請があった。コンピュータ化によって各種の助成金をはじめ、老人、寡婦、児童、障害者、失業などの社会福祉金の受けいれや配布、美術工芸の生産、在庫、売上、車両の購入、修理の記録などこの社会の経済の流れと社会の構成をデータ化し、処理できることになる。これらのデータが明確になれば、これまでの民族誌的な個人観察をはるかにこえた全体像の把握が可能になると私たちは考えた。そのため1988年から BAC 事務局長の D. ボンド氏と久保、杉藤が、システム整備のためのプログラム開発とデータのコンピュータ化のためのプロジェクト・チームを作り、実質的な作業を続けている。

しかし、原データの不備、現地のハードウェア環境の悪さ（建物の気密性の悪さ、操作者の不手際、停電など）、日本とオーストラリアの距離、時間差、日本人・白人・アボリジニの三者の間の考え方の違い、など数々のトラブルに直面している。したがって、このプロジェクトが成功するかどうかの予測はまだたたないのだが、久保の論文にみられるように、すでに興味深い学問的副産物が生まれつつある。

## 5. 子供と心理

心理学的な分野の調査の発展は、マニングリダの小学校からの要請であった。現在のオーストラリアの統一カリキュラムはアボリジニ教育の効果をほとんどあげていないということは周知の事実である。1988年に板良敷がおこなった子供の遊びの調査に協力したアウトステーションで教える教師がその成果をとりいれてカリキュラムを工夫し、効果をあげたという報告があった。また、藤岡らはバウム、箱庭法のテストの実施を依頼した前後につぎのような説明をおこなった。テストは心理療法としての応用とは別に、日本ではヨーロッパとの比較を中心に子供の発達段階を跡づけるという実績をあげている。すなわち子供とは自由奔放な未発達な状態から、年齢が上がるにしたがっていくつかの段階をへて社会化し、同時に規格化されてゆくものである。その発達段階は欧米と日本はおどろくべきほど相似たプロセスを示す。その意味では日本は西欧社会と基本的に同質であるといえるだろう。これに対してダトーガ族など非西欧社会では違った形のプロセスを示すらしい [藤岡 1974]。テストの結果によると、アボリジニの子供は非西欧型の発達プロセスを示している。

これに対して教育当事者は、現代の遠隔地におけるアボリジニ教育の苦悩は伝統を守ると共にいかにして西欧型の心理を持つ合理的な人材を育てるかにあるのだとい

う。彼らは、日本人を白人とまったく違う文化を保持しながら西洋型社会を作り上げ、さらに西洋を凌ぎつつある人々と理解しており、そんな視点をアボリジニ社会に適用できるのではないか、実験として私たちの調査に協力し、共に研究してゆきたいと彼らはいうのである。

## 文 献

COOMBS, H.L.

1978 *Kulinma*. Canberra: Australian National University Press.

デュルケーム

1975 『宗教生活の原初形態』上・下 古野清人訳 岩波書店。

HARRIS, M.

1971 *Culture, Man, and Nature: An Introduction to General Anthropology*. New York: T.Y. Crowell.

HIATT, L.

1965 *Kinship and Conflict*, Canberra: Australian National University Press.

藤岡喜愛

1974 『イメージと人間—精神人類学の視野』NHK ブックス 日本放送出版協会。

JONES, F.L.

1970 *The Structure and Growth of Australia's Aboriginal Population*. Canberra: Australian National University Press.

ユング, G.C.

1985 『変容の象徴』野村美紀子訳 筑摩書房。

小山修三

1987 「オーストラリア・フィールド事情」『民博通信』37: 56-59。

1988 「オーストラリア・アボリジニ社会再編成の人口論的考察」『国立民族学博物館研究報告』13(1): 37-68。

1990 「アボリジニ（オーストラリア）—近代化と伝統への回帰」『文化人類学』7, アカデミア出版。

レヴィ=ストロース, C.

1977, 78 『親族の基本構造』上・下 馬淵東一・田島節夫監訳 番町書房。

RADCLIFFE-BROWN, A.R.

1930, 31 The Social Organization of Australian Tribes. *Oceania* 1: 34-63, 206-246, 426-456.

ROBERTS, Richard G., Rhys JONES & M.A. SMITH

1990 Thermo luminescence Dating of a 50,000-Year-Old Human Occupation Site in Northern Australia. *Nature* 345(10, May): 153-158.

ROWLEY, C.D.

1970 *The Destruction of Aboriginal Society*. Canberra: Australian National University Press.

新保 満

1979 『野生と文明』未来社。

THORNE, A.G.

1977 Separation or Reconciliation?: Biological Clues to the Development of Australian Society. In J. Allen, J. Golson & R. Jones (eds.), *Sunda and Sahul*, New York: Academic Press, pp. 187-204.